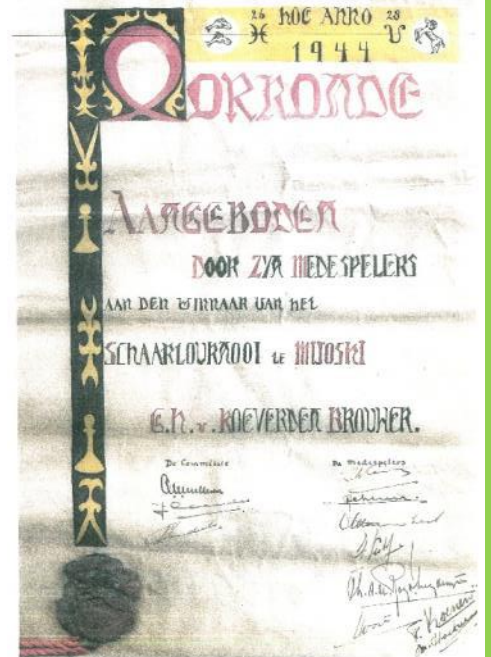
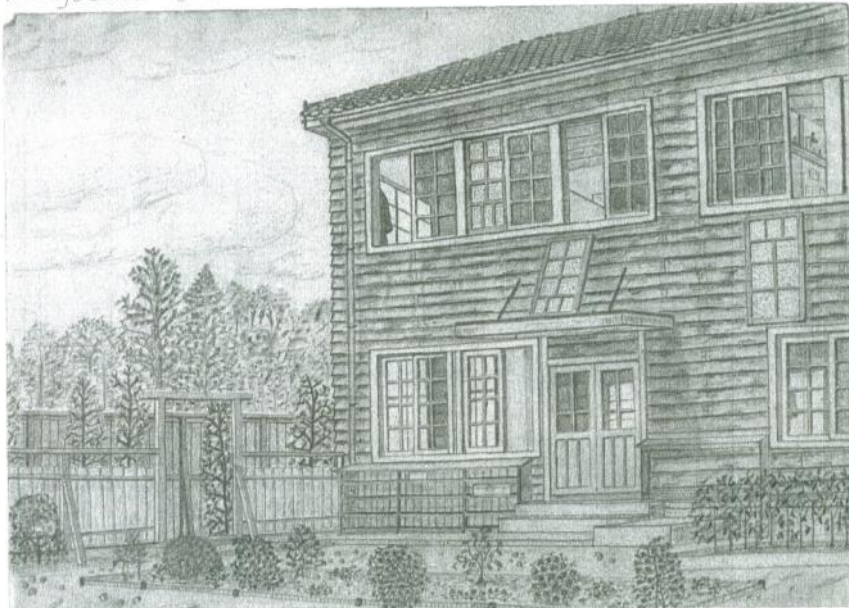


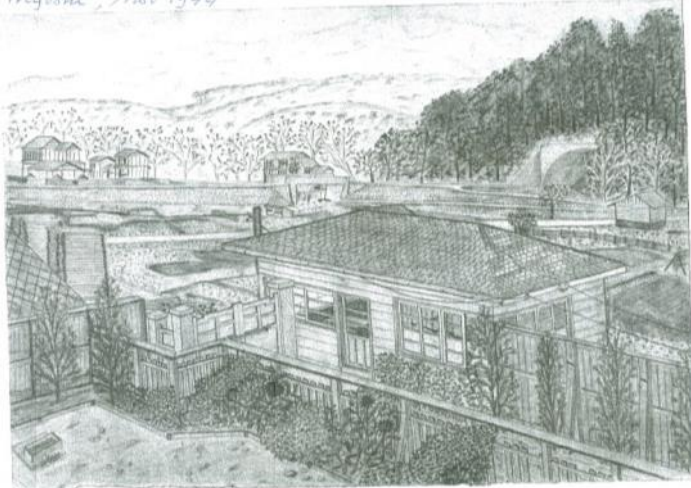
平和 幸せ わが町 わが故郷 三波(みよし)

～平和をねがうメッセージ～

Miyoshi. 1944



Miyoshi, Nov 1944



平和

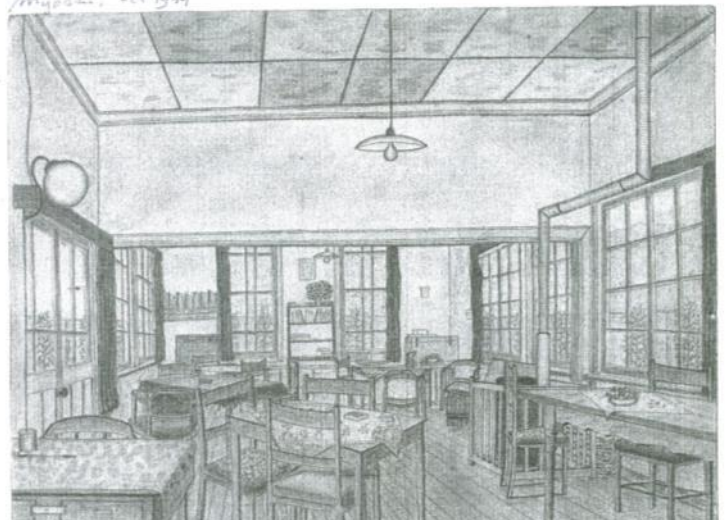


幸せ

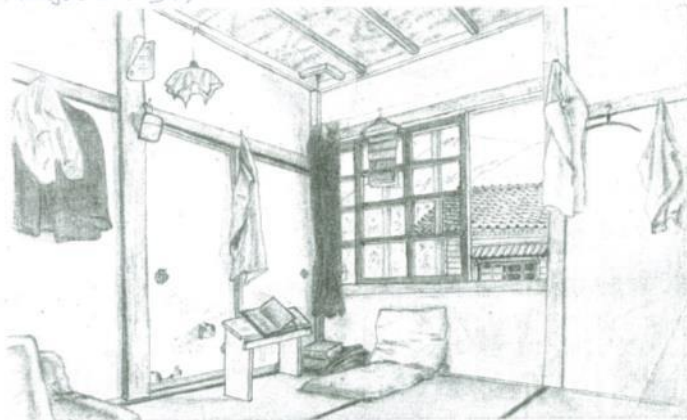


SS "OP TEN NOORT"

Miyoshi, Oct 1944



Miyoshi. 1944



三次捕虜収容所スケッチ

太平洋戦争中に三次市三次町にあった、「三次捕虜収容所」に収容されたオランダ人故ヘリット・クーフェルデンさんが描いたスケッチのコピーが三次市立図書館に贈られた。ヘリットさんの息子ヤンさんは「地元の人に父の過ごした収容所の生活、当時の戦争の歴史を知って欲しい。」という願いを込めてスケッチ画を贈られた。

今年も平和について考える日が来ました。

まず引っかかるのは「平和」って何だろう？ということです。Wikipediaで検索してみると「平和（へいわ）は、戦争や内戦で社会が乱れていない状態」と書いてありました。日本は1945年8月15日以降国内で戦争や内戦はありません。だから「平和」ということになります。「幸せ」何だろう？Wikipediaで検索してみると「心が満ち足りていること」と書いてあります。「平和・幸せ」について考えて行くと哲学者や思想家や宗教家などによって、またその時代によって変わってきているのか、永遠に思考するテーマなのも知れません。ただ私自身言える事は「私の父・母の青春時代は太平洋戦争の真ただ中だった。」私は戦後の生まれだから戦争は知らない。だけど私の両親は戦争を体験し、終戦後私を生み、育ててくれた。私はそのことだけでも「幸せ」だと思っている。今までにも色んなことが有った。これからも色んなことが起こるだろう、だけどこの時代にこの場所に生を受けたことが「幸せ」だと思っています

そんなことを思わせる鉛筆画がある。「オランダ人抑留者のスケッチ」だ。オランダ人乗組員、軍医、看護師ら42人とインドネシア人2人がインドネシア沖で捕虜と成り三次に留置された。その中の一人軍医のヘリット・ファン・クーフエルデンが留置中に周辺（尾関山付近）の建物や家々のスケッチをし終戦後オランダに持ち帰った。太平洋戦争は日本だけが戦争していただけではない。オランダも戦争中だった。日本に戦後があるようにオランダも戦後を迎えた。ヘリットさんが帰国後、家族に会うまでには相当時間がかかっている。ヘリットさんの息子ヤンさんと再会し、ヤンさんがスケッチを受け継ぎ、保管してきた。たまたま横浜市の小宮まゆみがアムステルダムでヤンさんと出会いスケッチの存在が知られた。この時ヤンさんは78才。小宮さんの紹介で「三次市立図書館」に寄贈が決まりこう言っている。

～父のスケッチは、父の望みに沿う素晴らしい落ち着いた場所を得た。～

戦争の真ただ中、食料も十分でなかった時代、敵国の捕虜を全員無事に敗戦した国が帰国させた。捕虜生活の中で病気になった人もいただろう。医薬品が十分でなかった時代、治療し介護して一人の死亡者も出さなかった三次の町の人たちの温かさ、スケッチする紙や鉛筆を与え風景を描く事を許し、帰国時に持ち帰らせた三次の人たち。・・・70年の時を超えてそのスケッチが三次に帰ってきた。こんな奇跡があるだろうか。・・・三次の人たちのあったかい魂と共にかたりつぎたい。

三次に「三次市立図書館」があってよかった。

それをきっかけに三次市立図書館とヤンさんの間で交流が始まった。

Dear Ms.Nanae Arimitsu,

I am very honoured that you publish the drawings of my father in your library.

It was always my wish to publish the drawings my father made during his stay in the POW camp Miyoshi in relation to Miyoshi.

Thanks to Ms.Mayumi Komiya, I have met in Amsterdam, that she got the idea to write to your library if you are interested in. Your idea: *"We would like to keep these important materials and utilize them for peace education. We will also pass these information to the next generation so that such tragedy do not repeat itself again."*

Is very good and exactly what my father would have meant.

Kind regards,

Jan van Koeverden